

一般に、幼児に対して漢字教育を行うことは無理ではないか。詰め込み教育になりはしないか。

漢字は“目で見る言葉”です。“目で見る言葉”は、本質的には“耳で聞く言葉”よりもとらえやすく、従って覚えやすいものです。ですから、「言葉が覚えられるほどの幼児なら、漢字が覚えられないということとはあり得ない」というのが、私たちの基本的な立場なのです。事実、石井教育研究所(八王子市所在)には、言葉が覚えられない脳障害児・精薄児が通って来て漢字教育を受けていますが、彼らは、漢字とその漢字の意味する内容とを結びつけ、漢字カードを提示すれば正しくその内容を指示するようになります。しかも、そういう学習を反復することが脳の良い刺激となって脳の機能を発達させ、今では発音もできるようになり、四歳の脳障害児でも、一年間に約50字の漢字を覚え、それが正しく読めるようになることを実証しました。言葉が全く話せない四歳の脳障害児でさえ、現在の小学校一年生が一年間に学習する漢字に匹敵するだけのものが覚えられます。正常の幼児にとって、漢字がむずかしいはずがありません。

好奇心の旺盛な幼児にとっては、漢字は覚えるのが楽しい玩具なのです。児童生徒が漢字をむずかしいとしているのは、覚えるべき時期を逸して、機械的な記憶力(大脳生理学では、三歳時を最高とし以後は低下に向かうと説いている)が減退してから学習しているためなのです。